

## 企業にIS部門は必要か (下)

宇高直史

前回は「現実にはスポンサーが言ったとおりのシステムしか作れない」というところで終わりましたが、本当にIS部門はそれが不可能なのでしょうか。

これがユーザとソフトウェアハウスの関係なら、まあ難しいでしょう。しかし社内のIS部門なのだから、会社の利益にならないと判断したなら、お金を返して開発を引き受けないという方法もあるのではないのでしょうか？

もしそれが不可能であるとしたら、**会社の仕組みに問題がある**と筆者は言いたいのです。無論これはIS部門が効果のあるソリューションを提示できるという前提ありきですが、IS部門が経営的視点でもの言えない環境であれば、この会社は将来的にIT技術を駆使して競争に勝ち抜く企業にはなり得ないといっても過言ではないでしょう。

現在、CIOというエグゼクティブの存在が、米国をはじめとして企業の経営を**大きく左右**しています。つまりITの専門家(技術onlyの専門家ではありません)が、IT戦略の責任者として経営に参画していかなければ、企業はこれからの競争に勝てなくなります。CIOが責任を持って、トップダウンでIT戦略を実行していく、そしてその右腕であり手足であるIS部門が、CIOを助け、時には利用して会社の利益となるシステムを構築していけばよいのです。システム構築のアプローチも、ボトムアップでなくトップダウンで、トップの意思を反映したものになっていくことでしよう。

**逆の言い方をすれば**、CIOの戦略を実行できる能力を持っていないIS部門は、企業に置いておく必要はありません。CIOとIT技術を押さえた数人のブレーンがいれば、すべてアウトソーシングしてしまうことが企業にとって望ましい選択です。しかしCIOにとっては、もし会社の経営に貢献できるだけの能力を持ったIS部門があれば、非常に心強い存在になるでしょう。もしコンサルタント能力が同等なら、コンサルタント会社の人より社内にいる人の方が、適切な指導ができるに決まっていますから。

結論として「企業にIS部門は必要か否か」は、**個々の企業次第**なのです。しかしそのIS部門に在籍されているSEの方々には、組織の枠にとらわれず、従来の仕事にとらわれず、積極的にユーザとコミュニケーションを図り、問題意識を常に持ち、自分がこの会社のCIOだったらどうするだろうか、という視点で仕事を進めて欲しいと思います。今の時代、自分が所属する企業が将来どうなるかは不明です。しかし将来のCIOになれるようなスーパーSEは将来引っぱりだこであることは間違いありません。SEの方々にはIS部門という組織に安住せず、自分の可能性を伸ばしていただきたいと、筆者は切に希望する次第です。

### 参考文献

- 1) 野村総合研究所システムコンサルティング事業本部: 図解CIOハンドブック, 野村総合研究所 (2000).
- 2) 加藤忠宏: インターネット時代のSE分類学, 技術評論社 (1996).

